日韓国際シンポジウム 「伝統医学における日韓交流の歴史」

1　日韓伝統医学の学術交流シンポジウム開催にあたって

寺澤　捷年（日本東洋医学会会長）

2009年に大韓韓医学会と日本東洋医学会の学術交流協定が結ばれた。

これは歴史的にみてまさに画期的なことである。私は09年６月に日本東洋医学会会長に選任されたが、その折りの学術総会に金（きむ）　璋顯（じゃんひょん）会長はじめ皆様に来日頂いた。

また昨秋には私どもがソウルにお招き頂き、学術交流の実を挙げることが出来た。

そして今回は大韓韓医学会の新旧の会長を初めとする皆様に日本にお出で頂いた。

心から厚く御礼申し上げたい。私の記憶によると両学会の交流協定では一年ごとに交互に訪問するよいう内容であったが、交流協定を土台にこの様な緊密な連携が取れていることは誠に喜ばしい。伝統医学を取り巻く世界情勢も大きく様変わりしそうである。今こそ日韓両国が連携し、それぞれの文化を認め合い、高めあって行かなければならない時を迎えていると考える。

略歴

1970年　千葉大学医学部卒業
1979年　富山医科薬科大学附属病院・和漢診療部講師
1990年　同・和漢診療科教授。医学部長副学長（病院長）を歴任
2005年　千葉大学大学院・医学研究院・和漢診療学教授
2009年　社団法人・日本東洋医学会会長

2　日本が受容した韓医学と古医籍の交流史

真柳　　誠（茨城大学大学院人文科学研究科教授）

いま日中韓の伝統医学は固有の歴史と特徴を持ちつつも、かつてない相互往来の高潮を迎えている。そこで日本が受容した韓医学と古医籍を中心に、その歴史背景を考察したい。

日本への韓医学の伝来は６世紀に記録が始まる。そして10世紀の日本医書が引用することで、韓医籍最古の書名・内容が知られる。このように古代から受容され続けてきた韓医学は、豊臣秀吉の侵略を契機に最大の影響を日本に与えた。その中心は多量な朝鮮版医書と出版技術の伝来である。影響は医書の利用や普及にとどまらず、版式や字体の模倣までおよんだ。他方、韓医籍や韓版医書の学術性も高く評価され続け、復刻が重ねられていた。それら文献には日中韓にまたがる多様な伝承経緯と変遷が認められ、結果的には漢韓医籍の散逸を防いだ場合もある。歴史の大河は民族・文化、そして国境も海峡も容易に超越して連動させる。医学といえども、その例外ではありえない。日中韓の医学が渾然一体となって変化し、固有の発展を遂げてきた歴史を、いま我々は思い起こすべきだろう。

略歴

1977年　東京理科大学薬学部薬学科卒業
1992年　昭和大学医学研究科薬理学博士課程修了
1983/09-1992/03　北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室客員研究員
1992/04-1994/03　北里研究所東洋医学総合研究所医史文献研究室研究員
1994/04-1995/03　北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部主任研究員
1995/04-1996/04　北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部・医史文献研究室室長
1996/05-　茨城大学人文学部教授・同大学院人文科学研究科教授

研究分野
漢字文化圏、医学史、本草史、文化交流史、書誌学

最近の研究テーマ
中国古医籍が日・韓・越の伝統医学形成史に与えた影響の書誌学的研究 2006-2009（キーワード:中国古医籍 日・韓・越 伝統医学形成史）

３　韓国と日本の歴史上の医学交流
－新しい時代の使命のために－

金（きむ）　性洙（そんす）（大韓韓医学会会長）

過去の長い期間、医学交流を通じて韓国と日本は医学上の発展を築き上げてきた。これは古代から現代に至るまで、絶え間なく伝統を引き継いできた歴史的現状である。両国が医学交流により共同で成し遂げた医学的成果は、我々全てが大切にしなければならない世界人としての文化遺産である。近年国際化、世界化などの単語が世界的なキーワードとして取り上げられており、韓日間の伝統医学に対する学問的疏通が重要な懸案になっている。我々は過ぎ去った歳月を振り返りながら、新しい道を切り開く発展的方案を模索すべき時期にきている。

演者は韓国の大韓韓医学会会長として数カ月前に被選された以降、力点を置くべき事案の中で、国際学術交流を取り上げている。今回の学会においてこのような主題で発表できる機会を与えられたことは、韓日間の友誼を厚くすることに意味があるだけでなく、学問的交流を通じて両国の未来医学を構築する方案を講究することにも意味があると考えている。

韓国と日本両国間の医学的交流の起源はかなり古い時代になる。歴史の記録が不足しており、その始まりにを断定することは難しいが、記録の上では紀元後414年（新羅第18代実聖王13、日本允恭主３）１月１日に、日本允恭主が王位に就く前から患っていた病を治すために良医を求めて、新羅から金波鎮を派遣し病の治療を行い、充分な報償を受け取り戻ってきたとの記録である。金波鎮は日本では「久須利師」と呼ばれている。その後「久須利師」は病を治療する象徴的な人物とされ、くすり「薬」の語源もここから生まれた。

その後459年（百済第21代盖鹵王５、高句麗長壽王47、日本雄略主３）に、日本が百済に良医を請願し、百済が高句麗医の徳来を送った。日本に渡った徳来は子子孫孫医を職業としてするようになり、難波薬師の称号を授かった。日本に唐医方を始めて直接持ち込んだ難波薬師の専日は徳来の５代目の孫である。553年（百済第26代聖王31、日本欽明主14）６月に、日本は医博士、易博士、暦博士などの任務期間が終了したため、彼らを交代することと薬物を送ることを願い出た。その翌年百済は医博士の奈卒王有陵陀、採薬師の施徳潘量豊と固徳丁有陀、そして薬物を送ることにし、２月日本に倒着した彼らは任務を交代した（『日本書紀巻第19』）

561年（高句麗第25代平原王３、日本欽明主22）に、中国江南呉国の知聡が『内外典』、『薬書』及び『明堂図』など164巻を携えて高句麗にやってきた。562年（平原王4, 日本欽明主23）に、大伴狹手彦が高句麗を侵伐し退却する時に、知聡が書籍を携えて日本に渡った。知聡は呉王昭淵の息子であり、善那使主の父でもあり、善那は日本において和薬使主の称号まで授かり、子孫代々難波で生活した（富士川遊『日本医学史』）。

984年（高麗成宗３、日本圓融主永觀２）に、日本の医家である丹波康頼が 編述した『医心方』には『百済新集方』、『新羅法師方』、『新羅法師流觀秘密要術方』、『新羅法師秘密方』など、この当時以前の韓国医書の内容が収録されており、この時期までに行われていた医学交流の一面を見ることができる。

高麗時代（918-1392）における韓日間医学交流に関する記録は不足している。しかしながら、文宗、宣宗時代に、日本は水銀、硫黄、真珠、海藻、柑橘のような珍貴な薬材を高麗に進上したとの記録がある。また1079年（文宗33）に、礼賓省において国王が風痺症を治療するために、日本商人の王則正が日本に戻る便で牒状を渡し医員を求めたが、日本は高麗の牒状に彼らを侮蔑した文句があり、また定式の使臣ではなく商人に付託したとして医員を送らなかったとの記録がある。この時は結局宋医を招請して治療したが、日本との医学交流がある程度あったことが理解できる資料である。

そして1232年（高宗19）から1251年（高宗38）の間に刊行されたと推定される『郷薬救急方』が日本の宮内庁図書寮に所蔵されており、この時期韓日間の 医学交流の 一面を見ることができる。

朝鮮時代（1392-1910）に入り、韓国は医学上多数の成果を出している、特に 世宗は郷薬を奨励するために『郷薬集成方』（1433年）を刊行し、韓国医学の独自的発展を試み、当時東アジアに存在する医書を整理し、『医方類聚』（1445年１次完成）を編纂した。『医方類聚』は現存する医書だけでなく失伝した数多くの医書も含

まれている点において、学術史的価値の大きい著作である。特に『医方類聚』は壬辰倭乱の時（日本では文禄慶長の役と呼ぶ)、日本の将軍加藤清正が1592年漢陽から持ち出して日本の多紀家に保存されていたものを、近世に喜多村直寛が復刊し、聚珍版として作成された歴史的医書である。

1610年許浚は『東医宝鑑』を完成させたが、この医書は2009年７月にユネスコ世界記録文化遺産に医書として始めて登載された医書である。日本ではこの医書を２回刊行している。最初は享保初刊本であり、２回目が寛政重刊本である。享保初刊本は日本の享保９年（1724甲辰）の初刊本として、日本京都書林において始めて刊行された。刊記に“享保九年甲辰仲夏刻成”と記されている。寛政重刊本は日本で初刊本が出た後76年後に日本の寛政11年（1799己未）に刊行された重刻本である。刊記に“寛政十一年己未年仲冬求版　大阪書林 和泉屋善兵衛 河内屋喜兵衛 河内屋太助 河内屋上口兵衛”と記されている。特に1723年日本の医官である源元通が朝鮮版『東医宝鑑』を校正し、『訂正東医宝鑑』とした名前で刊行して記された跋文は有名である。

朝鮮では日本に派遣した朝鮮通信使は、東アジア地域の善隣友好関係を回復しようとした日本幕府が朝鮮に要請して実現したものである。この使節団は 1607年から1811年までに12回派遣されているが、元々は捕虜送還及び将軍職継承の祝賀等一種の政治的な目的から出発したものであるが、漸次文化交流としての意味がさらに重要となっていった。このような理由から朝鮮通信使の日本訪問は、幕府当局は勿論各領主を始め、医師、武士、農民等の一般庶民に至るまで関心が高かった。中でも日本人たちの朝鮮医学に対する関心はとても至大であり、1936年からの日本幕府は特別に有能な医官を派遣してもらうよう別途要請もした。これ以後毎回施行のたびに朝鮮では‘良医’とされる職を備えた医師を派遣し、専門的に日本医学界の人物たちと交流するように配慮された。日本の医学者たちは通信使を随行した良医及び医員たちと交流した内容を問答形態で記録したものを出刊し、現在発掘されている医学関連問答記録は43種である。

1876年日本と丙子修護條約が締結され開港した以後、西洋医学の流入が始まり、韓国では二元的医療体系が成立するようになった。日帝時代（1910-1945）日本人たちの傷寒論研究は韓国人の著述にも大きな影響を与えるようになる。1939年８月10日に発行された『漢方医薬』第27号には、日本人学者矢数道明の文が全載されている。日本皇漢医学の大家である矢数道明の文は『漢方医薬』に毎回掲載されるようになり、怡雲学人の筆名を持つ韓国人の文である「漢医学の外科」には、矢数道明と小出、木村、大塚など日本医家達の問答形式の文を多く見ることができる。これは日本の傷寒学が当時多く研究されていたことを意味する。解放後にも、日本の古方医学は李殷八、孟華燮、蔡仁植などにより持続的に研究されており、今も多くの韓医師たちがこれに関する研究を行っている。

1964年10月、裵元植（1914-2006）は日本の東京に渡り、翌年に開催予定の第１回国際鍼灸学会学術大会の大会組織部長である木下晴都と面会した。この時招請状を受け取り、翌年の1965年10月18日の第１回大会に、権度沅、秦泰俊そして裵元植の３人が代表として日本に派遣された。1969年５月フランスのパリで開催された第２回大会には次期大会を韓国で開催することが決定され、1973年９月25日に第３回 国際鍼灸学会学術大会がソウルで開催された。

1975年米国ラスペガスにおいて開催された第４回国際鍼灸学会学術大会において、国際東洋医学会を創立することが決議され、1976年創立された国際東洋医学会は韓国、日本、台湾の３カ国が代表として構成されており、理事会を運営し主要政策の立案、学術大会開催地、海外交流活動の決定などを行う最高議決機構として、現在まで韓国と日本間の学術交流の中心軸として活躍している。

略歴

1952年６月19日生まれ
1975：慶熙大学校韓医学士
1977：慶熙大学校韓医学修士
1985：慶熙大学校韓医学博士
2005-2008：慶熙大学校附属韓方病院院長
2007-2008：大韓韓方病院協会副会長
2007-現在：韓国保健医療院国家試験院理事
2010：大韓韓医学会会長